

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名 渡邊邦夫

渡邊邦夫氏の『アリストテレス哲学における人間理解の研究』は、人間理解という観点から、アリストテレス哲学の出発点を捉えようとする試みである。研究対象とされるのは、アリストテレス哲学の最も基本的な諸概念——徳、友愛、生成消滅、偶運（偶然）、実体、形相、思考——であり、枝葉ではなくまさに根本を論じようとする姿勢およびそのスケールの大きさは、審査委員にも高く評価された。また、そうした諸概念を解明するにあたって本論文がとった方法も独自のものである。本論文は、アリストテレスの発想の原点を探るため、諸テキストの中でもとりわけアリストテレスの発想の源に触れるような箇所を扱い、そうした発想はアカデメイアの学生であったときから醸成されてきたもののはずであるという考えのもとに、従来プラトンとは対比されてきたアリストテレス哲学をむしろプラトンとのつながりを重視しつつ、読み解いていく。いわば、理論体系としてアリストテレス哲学を解明するのではなく、実践的な脈絡にテキストを位置づけ、そこからアリストテレスの最も創造的な原液の一滴を取り出そうというのである。これは、本論文における渡邊氏独自の的方法論であり、本論文というよりも本論文をその一通過点とする渡邊氏のアリストテレス研究全体が従来のアリストテレス研究の中でもつ価値にほかならない。

また、本論文のもう一つの特色は、アリストテレス哲学をたんに過去の哲学として研究するのではなく、現代哲学と同じ土俵で戦い、ときに現代哲学を批判し、ときに現代哲学をリードしていくアクチュアルな立場として描き出そうとする姿勢にある。そして本論文は確かに、アリストテレスの最も基本的な考え方を取り出し提示することにおいて、現代哲学へと緊密につながりあう扉を開き、ときにはアリストテレス哲学を現代哲学のただ中に投下することに成功したと言えるだろう。

アリストテレスの発想の原点を取り出そうとする試みは、必然的にアリストテレスの諸研究を横断するものとなる。そこで本論文は、倫理学、自然学、形而上学および心の哲学にわたる多面的な領域を扱うことになる。しかし、その多面性にも関わらず、本論文は一貫性を保ちえている。それは、本論文がまさにアリストテレス哲学の源流に触れているからであり、複数の領域に共通する発想の原型を取り出し、互いに呼応しあう議論の筋道を示しているからにほかならない。このように、多面的なアリストテレスが本論文において統一的な姿をもって描き出されていることも、高く評価された点である。ただし、本論文においてその統一性は必ずしも見てとりやすい形では提示されておらず、熟読してのちに読者自らが得心するに至るようなものであったことも言い添えておく。

全体は三部構成となっている。第一部は『ニコマコス倫理学』を主要テキストとし、徳と友愛について論じる。第二部は『自然学』を主要テキストとし、生成消滅と偶運について論じる。第三部は『形而上学』『デ・アニマ』『命題論』を主要テキストとし、形相と実体、およびそれを受けて思考と同一指定（identification）の関係を論じる。

第一章はアリストテレスの倫理学における最も基本的な「徳は中間である」という主張の解釈に関わる。渡邊氏は、従来の解釈がこの主張を理論的な脈絡でのみ捉えようとしてきた点を

批判し、より実践的な脈絡で捉えるという斬新な解釈を提示する。すなわち、聴衆（読者）たちに徳を勧めるという言語行為として、アリストテレスの言葉を読みとろうというのである。その結果、一般規則だけで道徳を語るのではなく、同時に個別的な状況への鋭い感受性を重視する立場（個別主義）としてのアリストテレス倫理学が説得力をもって浮かび上がることになる。また、個別主義という立場から現代でもなお中心的課題の一つである相対主義の問題に向かい、反相対主義としての議論を展開する。アリストテレス哲学を越えて現代の論争点へと踏み込んでいこうとする姿勢は本論文の評価すべき特色の一つであり、実際、審査会では、相対主義からの反論も挙がり、審査委員以外の聴衆を巻き込んだ議論の応酬があった。

第二・三章は友愛の問題を論じる。ここでも渡邊氏はアリストテレスのテキストを対人的な説得の言語行為として読もうとしており、その試みは一定程度成功していると評価できる。ただし、友愛の必要性については、渡邊氏の描き出したアリストテレスの考えの正当性を巡って、審査会ではなお反論もあり、議論の応酬があった。

第四・五章では、アリストテレスが質料概念を発見し、それによって自然学の扉を開いていた事情が語り出される。そのさい、第四章ではエレア派の生成否定論をアリストテレスがいかに論駁したかが描き出されるが、このようにエレア派に照明を当てた捉え方は本論文独自のものと言える。また、第五章では、ときにプラトンと対照的なものと捉えられるアリストテレスの自然学を、むしろプラトンから基本的な枠組を受け継いでいるものとして描き出している。続く第六章では『自然学』の中でも「偶運」に焦点を当て、ここでも渡邊氏は従来解釈と異なる新しい解釈の提示を試みている。

第七章では形相が第一実体とされることの意味を解釈する。アリストテレスにおける質料に対する形相の優位という論点に対して、ここでも渡邊氏は自らの解釈を展開する。だが、個体を成立させるものとしての形相に焦点を当てるため、「アリストテレス哲学においてそもそも個体が最重要な主題となった経緯が捉えられていない」という不満も表明された。それは、本論文が『カテゴリー論』を主題的に扱っていないことに対する不満でもあり、今後の研究課題であることが確認された。

第八章では第七章の考察がさらに展開され、何ものかある形相のもとに同一指定するという人間の能力を、その知的成長との関わりのもとに描き出そうとする。こうして、第一章において人間の徳の成長から論じ始め、最後に知的成長を論じることによって、本論文は一応の完結を見ることになる。

以上に述べてきたように、審査会の席上でも本論文は随所で議論を巻き起こした。しかし、これは哲学の議論ではあたりまえのことであり、その議論の激しさはむしろ本論文の生産性を示すものにほかならない。実際、手厳しい批判を行なった審査委員の口から、同時に「最大の賛辞を惜しまない」という意見も出されている。口々に反論が挙げられたが、本論文がたいへんな力作であり、きわめて高い価値をもつ論考であることに関しては、全員が一致して認めるところであった。

よって本審査委員会は、渡邊邦夫氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。